

小品を通して感じたこと

3年生の一大行事ともいえる小品が十月七日に無事に終わり、私の所属しているゼミがめでたく優勝することが出来ました。小品は中国語学科のゼミ対抗で劇の演出や中国語の発音の正確さを競う行事で、今年で第十二回目を迎えています。有意義な時間を与えてくれた小品を通して気づいたこと、感じたことを書いていきたいと思っています。

私のゼミは小品前に一度ドイツの童話「小红帽（赤ずきん）」の劇を六月に開催されたドイツ習慣で、中国語学科を代表し演じたことがありましたが、小品では台本や配役をほとんど変えて改めて劇を作るところからのスタートでした。最初は久しぶりの演技だったこともあり、練習の時からなかなか大きな声を出すことができません。正直練習し始めの時は、なかなかビシッと締まらない雰囲気を感じていました。心のどこかでセリフも少ないし、そんな早くから頑張らなくても大丈夫だ



ろうという気持ちがあったのかもしれませんが。他のゼミが練習していると聞いても「私たちならできる。」という傲りがあり、気にも止めていませんでした。しかし裏方の仕事に回って与えているメンバーを見て、(他のメンバーは自分の仕事に責任をもってこなしている。自分は小さな役でもこの役しかやるのではないのならこの役は完璧にしなければならぬのではないか。) という思いが芽生え始めました。頑張らなくてはいけないと最初に思ったのは、声のボリュームと体の向きで

す。日本語でも中国語でも大きな声でないとい何を言っているのか全くわかりません。ネイティブの友人がせっかく居るのに、そもそもなにを言っているのかわからないと発音も直せません。初めは声のボリュームを意識しながら練習をしました。そして小品で最も評価されるのは発音です。発音はネイティブの友人が発音を録音してくれて何度か何度かその録音を聞いて声に出して練習しました。しかし自分で練習するだけでは、癖がついた発音を直すことはできません。練習中にネイティブの友人が指摘してくれた部分を中国語ができる人に教えて貰いながら練習しました。みんなで顔を合わせながら読み合わせ練習もしました。発音は本底に徹底して練習した気がします。私が一番躓いていたと思うのは「花生和黄酒」というセリフで、花生(huasheng)は花(hua)も生(sheng)も両方第一声なので発音が私にとってはとても難しかったです。花生の後に続く和黃

外国語学部 中国語学科 3年 原田 千愛

小品を通して感じたこと



酒の発音の声調が安定しなくなってしまっ、第二声の和(he)の発音まで第一声で繋げてしまったり、和黃(hehuang)が両方第二声なのに黃(huang)第三声のように下がってしまったりネイティブの発音を音で覚えるのに時間がかかりました。そんなふうにも何度も練習していくとセリフにどんなん気持が入っていききました。セリフを覚えて話す、というより本当に会話するような気持ちになるのです。私はその部分は他のゼミに負けないと思っています。大役でも小さな役でも本番は本当にみんなセリフがお腹の中に入っていました。だからこそみんなつまづくことなく、成功したのだと思います。練習していく上で気づいた重要なことは、一つ目ではできないことはきちんと認めて練習することです。指摘された部分はきちんと認めて練習しないと中国語は伸びて行きません。二つ目は小さな役でも大役だと思つて取り組むこと。劇団四季のような舞台でもオーケストラでも一人ひとりが舞台を成功させるのに必要な役を任されていると思います。大役でも小さな役でも平等に人に見られていることを自覚して練習に励むべきです。三つ目は積極的に小品を楽しむことです。練習を楽しんでやらないでいるとどんな面倒臭いと思うようになり、やり終えた時の充実感も味わえず、結果的に大変だった、楽しくなかったという記憶だけが残ると思います。私は寂しがり屋なのでゼミの友人達と一緒に練習することがとても楽しかったです。だからこそ練習中も真剣になれましたし、終わった後に充実感もありました。何事も楽しむことが大切だと感じました。自



分を客観的にきちんと見て、自分のやるべき事に責任を持ち、楽しもうとする姿勢でいることは自分を大いに成長させてくれると思います。今後また色々な活動がありますが、何事にも真剣に取り組んで心から楽しめたいなと思います。